



第4回 葬儀の花

□ 花祭壇の登場

葬儀が急激に変化しています。あるいは、すでに「変化してしまった」と言ってもよいかもしれません。どのように変化したのか、「葬儀の花」を例にして考えてみましょう。

葬儀における花とは何であるのか、どんな意味を持っていたのかを述べる前に、ここ五年くらいの間によく見るようになった「花祭壇」に着目してみます。亡き人の遺影を大きくして荘厳壇中央に安置し、その左右に赤や黄色、ピンクなどの色鮮やかな洋花を曲線的にあらったデザイン的な荘厳壇、これを花祭壇と呼んでいます。この花祭壇の登場は、「葬儀の花」とは何かという意識と感覚を、決定的に変えてしまいました。

花祭壇が登場する以前の荘厳壇は、白菊あるいは黄菊を半輿などと呼ばれる聖殿風の建物の左右に飾るものでした。しかし、この荘厳壇自体も、昔はなかったものです。荘厳壇の変遷は、昭和初期から昭和三十年代に一般的となった、白布を敷いた「白布祭壇」に始まります。やがて、高度成長期になると白布に代わって金欄が掛けられるようになり、次に彫刻が施された板で段を組む、白木の彫刻祭壇になりました。そして、花祭壇の登場となったのです。

□ 葬儀のイメージを変えた花祭壇

葬儀の花は、荘厳壇が装飾的になるに当たって変化していきました。それまで造花であったものを、生花に切り替え大量使用したのは、名古屋の一柳葬具總

本店が最初であったといわれています。

同店では昭和十二年に「生花部」を新設しており、手桶てびくや籐とう・青竹といった籠かごに生花を飾り付ける形式から、白菊・黄菊を多く盛り花にするスタイルへと、荘厳壇にあわせて花の飾り方を変化させました。

このように、装飾のスタイルは変わりましたが、この段階まで、葬儀の部屋は白幕びやくまくらで覆おおわれ、荘厳壇は白木造り、白木の位牌いはい（真宗では本来使用しません）、白の菊、喪主も白の喪服もくふくというように、全体的に葬儀は「白」のイメージでした。

しかしながら、現在の花祭壇では、さまざまな花や色が使用されています。故人がバラの花が好きだったということ、バラの花一色で飾ったという事例もあります。花祭壇の登場は、装飾の変化だけでなく、こうした葬儀の「色のイメージ」を完全に変えてしまったのです。

□ 「葬儀の花」は

シカバナと檜であった

それでは、荘厳壇が登場する以前の花はどうだったのでしょうか。棺ひつぎを中心にした簡素な荘厳で、出棺しゅつかん勤行を済ませると葬列を組んで野辺のべ送りを行い、ムラのサンマイ（三昧）で葬場そうじょう勤行をしていた時代です。

その頃、「葬儀の花」といえばシカバナと檜しのぎを意味していました。シカバナは、ご存じの通り釈尊しやくそんが入滅にゅうめつされたとき、近くに生えていた沙羅しゃら双樹そうじゆの花が一斉に散ったという故事こしによるものです。竹串たけくしなどに小さな白い紙を付けたものでしたが、最近さいきんは飾られなくなっています。

一方、檜しのぎは、いわゆる枕飾まくらかざりから用いられます。卓じよくの上に、檜しのぎを生けた白の花瓶かひんと燭台しよくたい、香炉かうろを置くのが一般的でしょう。少し前までは、これに枕飯まくらめしが必ずかならず供えられていました。お仏壇の荘厳も切り替えて、打敷うちしきを裏返して白、花瓶

も生花を止めて檜しのぎに代えます。「死」が確認されると、通常の生花を使うものではないという意識があったのでしよう。このように檜しのぎは、葬送の儀式において重要な意味をもっていました。

本願寺第九代実如上人じつにょしやうじんの葬儀を記録した『実如上人聞維中陰録じつにょしやうじんもんいちゆういんろく』に、御往生直後、臨終りんじゆう勤行を行う際に本尊前の荘厳は「花ハ檜ナリ」とあります。葬所から帰って御堂みどうでの勤行が終わった後、御亭おちんでの荘厳には「花足十二合。鏝ちゆうしやく石ノ三具足。花ハ檜也。御寿像ごじゆざうウラニ。拾骨しゅうこつヲオカル。」とありますから、花は檜であったと分かります。

では、なぜ「葬儀の花」が「檜」だったのでしょうか。残念ながら、檜しのぎに仏教的な意味や故事来歴はなく、日本人の民俗信仰による「死の作法」としか言いようがありません。

古来、檜しのぎは死者の霊を依り憑よかせる依代しよだいと考えられてきました。正月の歳神としがみを迎え祀る門松かどまつ、盆のオシヨロイ様という精霊しょうりやうを迎え祀るホオゾキや、高野槇こうやまきと

いった盆花と同じ性格のものとして捉えられます。京都では、いまでも墓前に供える花は生花ではなく桜とされており、カミ（神）に供える花が榊であるように、ホトケ（死者）に供える花は桜というのが、一般的だったのです。

□ 葬具の世俗化、装飾化

葬儀とは、一人の人間の死に直面して、日常とは異なる時間と空間で執行される葬送の儀礼でした。ですから、葬儀には普段と異なるシカバナや桜といった「葬儀の花」を使って、「日常」ではなく「非日常」であることを表示したのです。しかし、現代の葬儀は仏教的な要素がなくなり、生前の個人らしさを表現する「演出の場」となっています。

美しい花による装飾は、葬具が持つ宗教性を喪失させただけでなく、葬儀自身を世俗化させ、単なるお別れ会にしてしまったのではないのでしょうか。遺体は隠され、「死」が見えなくなる中で、いかに

に真宗としての葬儀を復権させることができるのか、課題の一つと捉えています。（本願寺仏教音楽・儀礼研究所委託研究員 蒲池勢至）

- 1 近年では、生花祭壇と言う場合もあるが、本稿では花祭壇と表記する。
- 2 棺を納めて運ぶ輿の名残り
- 3 死花・四華・紙華とも表記する

※タイトル部分の図は徳力善雪作「親鸞聖人絵伝」第八幅（本願寺蔵、部分）

本願寺仏教音楽・儀礼研究所
真宗儀礼論研究会 リーフレット

◆ 近刊のご案内 ◆



当研究所ウェブサイトより

ダウンロード（PDF）できます。

（A4 カラー両面印刷 三ツ折）

◎本願寺仏教音楽・儀礼研究所

<http://cfs.hongwanji.or.jp/ongji/>